

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K20826

研究課題名(和文) ソースコミュニティとの協働による「アイヌ木製盆」の文化資源化に関する研究

研究課題名(英文) A study on "Ainu wooden tray" in cooperation with people of source communities

研究代表者

山崎 幸治 (YAMASAKI, KOJI)

北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授

研究者番号：10451395

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アイヌ木製盆について、そのソースコミュニティの人々とともに調査をおこない、そこに作風と呼べるものが存在することを確認するとともに、制作地や制作者について検討をおこなった。数は多くはないが、制作地や制作者などの背景情報をともなわないアイヌ木製盆が、本研究をつうじてソースコミュニティの人々と再会し、地域の歴史のなかへと帰還したことは一つの成果といえる。また、民族誌資料データベースと先住民族との共同調査のあり方について検討した。

研究成果の概要(英文)：This research project examined "Ainu wooden tray" in cooperation with people of source communities (producers and users of materials and their descendants). We researched old Ainu wooden tray which did not have background data in museums. While conducting research about Ainu wooden tray, we found maker's personal style. Furthermore, we examined design and carved patterns and its regionality. The research project made opportunities of "reconnection" of the source community with museum collections. Some old Ainu wooden trays returned in local historical context. In addition, we considered the role of ethnographic database and collaboration research with indigenous peoples.

研究分野：文化人類学

キーワード：物質文化 文化資源 アイヌ 文化人類学 博物館

1. 研究開始当初の背景

2013年、アイヌ民族の工芸品の一つである「二風谷イタ」と「二風谷アットゥシ」が、北海道で初めての「伝統的工芸品」(経済産業省)として認定された。「二風谷イタ」とは、北海道沙流川流域に古くから伝わり、現在は主として北海道沙流郡平取町二風谷で伝統的技法が継承されている、木製の浅く平たいお盆のことで、その表面には、本地域に特徴的なアイヌ文様が木彫によって施されている。ちなみに「二風谷アットゥシ」とは、二風谷イタと同様の文化的・歴史的背景を持つ、オヒョウ等の樹皮の内皮繊維から作った糸を用いて織られた布のことである。

本研究代表者(以下、代表者)は、上記の申請作業において、指定の条件のひとつである「伝統的(100年以上)技術・技法であること」について、国内外の博物館に所蔵されるアイヌ資料に関する情報などを提供した。

その準備作業のなかで、平取町二風谷の人々、とりわけアイヌ工芸家の人々と幾度も対話をおこなった。代表者が対話をおこなった人々は、本研究に照らせば「ソースコミュニティの人々」と言うことができる。本研究では、「ソースコミュニティの人々」を、「現在博物館に所蔵されている民族誌資料の、制作者、使用者、民族学博物館による資料収集時の(資料や情報の)提供者、およびその子孫」の意味で使用する。(以下、「ソースコミュニティ」を「SC」と略記する)

対話では、下記の諸点が話題となった。

- ・地元(SC)には、博物館に所蔵されている「アイヌ木製盆」に関する情報が殆どない。
- ・現在、「アイヌ木製盆」に施されるアイヌ文様に画一化が進行しつつある。
- ・古い「アイヌ木製盆」に施された文様の方が、現在のものより多様かつ自由である。
- ・収集地情報が欠落している博物館所蔵の「アイヌ木製盆」なかには、地元(SC)で制作されたものと特定できるものが多く存在する。
- ・さらに、地元(SC)に暮らす作り手としての経験と知識にもとづき、その「作風」から、自らの先祖など個人レベルで制作者の特定が可能なものが存在する。

加えて、現在、アイヌの伝統的な木彫技術の伝承者が減少している深刻な状況がある。北海道内で最もアイヌ工芸が盛んな平取町二風谷においても同様である。本研究は、以上のような諸点を背景とし、代表者が専門とする文化人類学および博物館学が、先住民族といかにして互恵的関係を築きあげていくことができるのかという問題関心に基づき実施した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、前述したSCの人々との

対話を背景として、博物館に所蔵されている資料の文化資源化を試み、それぞれの資料に潜在している情報を引き出す方法を探求するとともに、アイヌ文化の新たな展開へとつながる道筋を模索することである。

博物館での民族展示に代表されるように、これまで博物館所蔵の古い民族誌資料(民具)は、収集時の情報不足など様々な理由から民族・地域レベルにおいて、研究者に一方的に論じられることが大半であった。本研究では、これらの情報が不足している資料を、SCの人々と協働しながら「作風」や「伝承経路」といった個人レベルで語りなおし、SCの歴史へ帰還させることを目指した。これは学術面でも、文化人類学(物質文化研究・アイヌ研究)および博物館学(資料情報に関する研究)を前進させることになる。

3. 研究の方法

本研究では、「伝統的工芸品」に指定された「二風谷イタ」に歴史的につながるものを含む「アイヌ木製盆」(アイヌ文様が施された木製のお盆)と対象として調査研究を実施した。

調査は、代表者のみによる資料調査およびアイヌ工芸家との共同調査をおこなった。木彫に深い知識を持つ工芸家を中心とする人々との共同調査では、資料を一点ずつ詳細に観察する「資料熟覧」に重点を置き実施した。

調査にご協力いただいた主な博物館は、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、国立民族学博物館、北海道博物館、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館、秋田県立博物館、東京国立博物館、日本民藝館である。

資料熟覧では、ビデオカメラとデジタルカメラを用いて、ご協力いただいた二風谷民芸組合の工芸家たちによる各資料についてコメントを記録した。なお、ビデオカメラを前にしてコメントをいただく際には、複数人でおこなった。

同時に、SCと協働しながら「アイヌ木製盆」に施されたアイヌ文様について、地域的特徴と、個人レベルでの作り手の「作風」に着目して検討をおこなった。検討は、調査の場における工芸家との対話をつうじておこなう方法と、調査終了後に撮影した資料の写真をプリントアウトし、それを調査参加者以外の人々も含めてワークショップ形式で検討する方法を採用した。

また、本研究で収集した情報を格納するデータベースが、研究期間後もSCに活用され、新たな文化資源となるための方策を検討した。そこでは、ワークショップのなかで出された工芸家のニーズを抽出するとともに、国立民族学博物館のデータベースなど、類似するデータベースも参照しながら検討した。

4. 研究成果

本研究課題の主な成果は、大きく分けて、

次の三点から整理することができる。一点目は、資料調査によりアイヌ木製盆についての知見が深まったことである。二点目は、本研究課題が、現在進行形のアイヌ工芸の実践に新たな刺激や影響を与えた点である。三点目は、SCとの共同調査の手法と民族誌資料のデータベースのあり方について知見が深まった点である。以下、それぞれについて概要を記す。

一点目については、資料の熟覧調査をつうじて、アイヌ木製盆のなかの多様性と、そのなかでの地域性や作り手の「作風」といったものが一部明らかとなった。また、文様や彫刻技術の歴史的な変遷についても部分的ではあるが把握することができた。

本研究課題では、個人レベルでの作り手の「作風」に着目して調査研究を実施したが、なかでも、東京国立博物館での調査において、貝澤ウトレントクの作品とほぼ特定できる木製盆（列品番号 27935）が、その直系の子孫にあたる工芸家による熟覧調査のなかで見出され、100年以上の時を経て「再会」を果たしたことは特筆される。本研究が目指した、熟覧調査に基づく博物館資料のSCへの歴史への帰還が実現したといえよう。なお、個人レベルでの作風の検討にあたっては、文様の形態よりも、文様の周辺部や文様以外の空白となる空間の処理の仕方などに、作り手の個性が出ることが多いことが明らかとなった。

文様や技術の歴史的な変遷については、三角刀の使用の有無が一つの指標になることが確認され、それは彫刻された線を詳細に観察することから判断可能であった。また、今回の調査でSCとして設定した二風谷地域では、現在、ウロコ文様は、周辺（外）から中心（内）に向かって彫刻面を掘りおこすことが伝統となっているが、古いアイヌ木製盆は、むしろ中心（内）から周辺（外）に向かっていくものが多く見出されることが熟覧調査から明らかとなった。これは現在の工芸家に驚きと強いインパクトを与えるものであった。それ以外でも多くの知見が得られており、その成果については継続して発表する予定である。

二点目については、本研究課題が文化資源化に関するものである以上、将来的なものとして予測していた現象であったが、本調査期間中から、熟覧調査のなかで得た知見や技術が、作家の作品作りに影響を与えたことが確認できた。なかでも、古い作品に多用されている斜線を用いるデザインは、それまであまり使われていなかったが、本調査研究のなかで再評価され、新たな作品に活かされるようになった。なお、熟覧調査のなかでの対話において、かつての作り手の自由な作風について言及される場面が多々あった。木製盆のデータが増加し、それらを文化資源として参照するなかで、将来においても新たな作風が生まれることが期待される。

三点目については、アイヌ木製盆に限定されない、より広い文脈に関わる成果である。それは、本研究でおこなったSCとの共同調査の方法と民族誌データベースのあり方について知見が深まったことである。

今回実施した共同調査では、通常の民具調査（資料の計測・スケッチ・写真撮影など）と熟覧調査（一点一点についての協議とコメント等の録画）の両方をおこなったが、調査をおこなうなかで、可能であれば、事前に通常の民具調査（資料の計測・スケッチ・写真撮影など）をおこない調書を作成し、その後機を改めて熟覧調査をおこなった方が時間的なロスも少なく、資料についての議論にも集中できることが分かった。また、各資料のコメントは、手間がかかるが、できる限り文字化（文字起こし）することで、その後の活用にも資することが分かった。文字化することで、個人情報なども含め、その内容を詳細に検討することが可能となり、またデータベース等への編入も容易となる。また、今回の熟覧調査は2名以上で熟覧後のコメントの録画をおこなったが、複数人での対話から、想定外の知見が引き出されることもあり、複数人によるコメントの記録化に一定の意義があることが分かった。

民族誌データベースのあり方については、工芸家のニーズを把握するとともに、他のデータベースを参考にしつつ検討し試作版を作成したが、まだ改善の余地が残る。

工芸家からのニーズとしては、資料の細部が拡大して見たいという要望が多かった。一般的なデータベースでは、全体が写る写真が2,3枚といったものが多い。現在は、それらを手がかりに資料を選定し、今回のような熟覧調査を博物館にて実施することが慣例であり調査の基本となっている。とはいえ、デジタル技術の進歩を考慮すれば、細部の観察が可能な高精細画像が閲覧できるデータベースは絵画などに限らず、民族誌資料においても意味はあるだろう。また、国立民族学博物館で現在進めている資料情報の再収集と公開適正化を図る国際共同研究（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト）と、そこで作成されたデータベースからは、多くの示唆を得た。

なお、本研究において、北海道博物館に調査の協力をいただいたが、その共同調査の様子と博物館の役割などについて、北海道博物館第1回蔵出し展「アイヌ民族の造形美 - 北海道博物館所蔵の木盆」（2016年12月22日～2017年1月15日）において紹介された。

現在、先住民族と博物館との新たな関係のあり方が世界各地で模索されている。本研究は、その一つの実践的な成果と位置づけられよう。

本研究期間内に調査しきれなかったアイヌ木製盆は、国内外にまだ多く存在している。今後も、本研究課題をさらに発展させ、アイヌ木製盆に関する情報を蓄積していくと

もに、共同調査の場で交わされた対話や交渉について、文化人類学や博物館学の視点から知見を深め、先住民族と博物館の将来の関係のあり方について考察し、広く発信していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

山崎幸治「モノをめぐる過去と現在」『原教界』, 査読無, 76巻, pp. 82-89. 2017. Miller, Mara, Koji Yamasaki Japanese (and Ainu) Aesthetics and Philosophy of Art, *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*, 査読無, 2017online, DOI:10.1093/oxfordhb/9780199945726.013.33

山崎幸治「在外アイヌ資料調査の経験から(コメント)」伊藤敦規(編)『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』国立民族学博物館調査報告, 査読有, 137巻, 109-112. 2016.

Yamasaki, Koji Overseas Ainu Collections and Info-Forum Museum Project: Comment, 伊藤敦規(編)『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』国立民族学博物館調査報告, 査読有, 137巻, 113-117. 2016.

山崎幸治「残すことから生まれることを残す 博物館というフィールド」『Field + : フィールドプラス : 世界を感応する雑誌』査読無, 14巻, 18-19. 2015.

[学会発表](計10件)

山崎幸治「アイヌ工芸 近年の取り組みを中心に」, 台湾原住民族委員会主催「日台業者間交流開幕レセプション」, 臺北華國大飯店(中華民国) 2018年3月16日.

山崎幸治「博物館学から」北海道大学アイヌ・先住民研究センター主催『アイヌ・先住民研究の“これまで”と“これから”』, ACU-A(北海道札幌市), 2018年2月3日.

山崎幸治「モノからみるアイヌ文化」名古屋外国語大学世界共生学部世界共生学科主催『先住民族としてのアイヌの文化と権利』, 名古屋外国語大学(愛知県日進市), 2017年12月11日.

山崎幸治「アイヌ工芸と守破離」平取町主催『シシリムカ文化大学 平成28年度第5回講座』ふれあいセンターびらとり(北海道平取町), 2017年2月20日.

山崎幸治「博物館における資料熟覧と対話」北海道教育委員会主催『アイヌ民俗文化財伝承活用事業総合伝承講座』TKPカンファレンスセンター(北海道札幌市),

2016年12月18日.

山崎幸治「博物館というフィールド アイヌ物質文化研究の現場から」北海道大学総合博物館主催『北海道大学総合博物館 第4回土曜市民セミナー』北海道大学総合博物館(北海道札幌市), 2016年9月10日.

山崎幸治「枝幸とメイベル・トッド 1896年に収集されたアイヌ民具を中心に」北海道博物館主催『アイヌ文化巡回展 アイヌ語地名を歩く 山田秀三の地名調査から』講演会『オホーツクミュージアムえさし(北海道枝幸町)], 2016年8月11日.

山崎幸治「アイヌ工芸と『伝統的工芸品』『二風谷イタ』『二風谷アットゥシ』を中心に」日本文化人類学会主催『日本文化人類学会第50回研究大会』南山大学(愛知県名古屋市), 2016年5月29日.

山崎幸治「『アイヌ文様』を考える 未来への展望」阿寒湖温泉アイヌ文化推進実行委員会主催『アイヌアートシンポジウム 「アイヌ文様」を考える』阿寒湖アイヌシアターイコロ(北海道釧路市), 2015年12月12日.

山崎幸治「アイヌ・コレクションがつなぐ平取とサンクトペテルブルグ」平取町主催『シシリムカ文化大学 平成27年度第2回講座』ふれあいセンターびらとり(北海道平取町), 2015年11月24日.

[図書](計1件)

Yamasaki, Koji and Mara Miller, Minh Nguyen (ed.) Lanham, MD: Lexington Books. *New Essays in Japanese Aesthetics*, 2017, 449(139-153).

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等
無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 幸治 (Yamasaki, Koji)
北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授
研究者番号：10451395